



復刊第52号

第十三回国際女医学会特集号

第十三回国際女医学会総会に出席して

会長 三 神 美 和

うち続く台風によって被害を受けられた会員の方々に心からお見舞い申し上げます。この台風は日本の地理的關係からうける自然の暴力とはいえ誠に残念なことであります。

この国内の台風をよそに、私共第十三回国際女医学会参加者九十九名は欧州へ出かけて参りました。一行は八月廿八日羽田を出発し、そのうちA班五三名は九月十五日に、B班二八名は九月十八日に、C班十八名は同二十一日に一同無事に帰国致しました。その間一名の落伍者もなく、何のトラブルもなく和氣霽々、友情を深めて参りましたことは、責任者として誠にうれしく、肩の荷の下りた思いであります。出発、帰国に際しては、理事の方々を始め、多数の皆様からお見送り、お出迎えを頂きまして、誠に有難うございました。ご厚情に對し心から御礼申し

上ます。

さてこのたびの国際女医学会総会は、私共日本女医学会にとって誠に関心の深い会でありました。その一つは学術方面の主題であり、その二は総会の決定事項でありました。今回の学会の主題「トキソプラズモージス」については、二年前から準備を進めていきました。幸い東京女子医大で寄生虫学の教室、産婦人科教室、眼科教室などで以前から研究してまいりましたので、会のプログラムに従い、私と小山教授が疫学的部門に、産婦人科吉田助教授が妊婦に於けるトキソプラズモージスの部門に出題し、結局両方とも採択され、講演することが出来ました。また名古屋支部で多数の血清検査を行った成績を追加されるなど、多忙の開業の中でも立派な業績を上げうることを証明して下さいました。何れも立派に発表が行われ、

内容も極めて勝れているという評判をうけましたことは何よりもうれしいことであります。



国際女医学会総会会場

総会での決定事項で私共の関心は次々回の会長と開催地のことであります。昨年の高知での日本女医学会総会で、日本女医学会は一九七六年の総会開催地として立候補、会長は小野先生を推薦するということが決定されました。この二つの行方如何が最も注目されるところであります。総会第一日目には、他に立候補者がなかったため、次々会長は小野先生と決定されました。また総会第二日目開催地については、候補地として、印度、イラン、イスラエル、日本の四カ国が有りましたが、理事の投票の結果、印度6、イラン11、イスラエル16、日本40ということで絶対多数で日本と決定されました。この決定の瞬間、私は希望の叶えられたよろこびと、これは大変なことになったという気持とが錯走して複雑

な心境になりました。然し各国の方々、これだけ多数の投票をこの日本にして下さったということは、第一に日本女医学会の実力、多数の会員、国際女医学会総会への多数の出席などが重要な要素となっていると思えますが、第二には、小野先生の多年に渉る国際連絡書記として、また副会長としてのご活躍、更にそれをひきついで佐野先生のご活躍に負うところが大きいと思えます。更に第三の重要な点は日本が平和の国であること、日本の国力(経済力)が大きくなったことであると思えます。日本と対象的でありましたのはイスラエルで、今度が三回目の立候補だそうですが、今回も駄目でした。選挙前の運動はすごかったようですが、投票日を前にして、あのオリムピック

の事件がありましたため、イスラエルの票が日本にかなり流れたのではないかと思います。平和が如何に大切か、人々は平和をいかに愛するかを如実に示すものといえましょう。一九七六年第十五回国際女医学会総会がくつ日本で、小野先生を会長として行われることになりましたが、これを立派にやり抜くためには、今からその準備にとりかからねばならないと思えます。資金面に於ても、学術面に於ても並大抵のことではないと思えます。そのためには会員の皆様の全面的なご協力が必要であります。万博医療に示した皆様のご協力を頼みにしております。全員一致協力の実をあげて立派にやり遂げることを今から期待しております。(九・一七 しるす)

国際女医学会総会を終えて

国際連絡書記 佐野アヤ子

第十三回国際女医学会出席者(九十九名)はとどことなく全員無事帰国致しました。この度の企画は新会長 Dr. Alma Dea Moroni の提案である三P (Planning, Patience, Persistence) に基いて一年有余の準備の後行われました。第十五回国際女医学会は一九七六年に日本で開催されますが、この三Pの原則を生かし、全員一致団結し、よりよい国際会議に致したいと存じます。

この度の学会参加者総数は六三八人で今迄は三五ヶ国が参加しております。たが、この度 Bahrain, Iraq, Mexico, Panama が加わり三七ヶ国となりました。Romania 代表は外貨持出禁止のため新会長 Dr. Moroni 及び幹部の方々の御助力により会議に出席出来るようになったという心温まる一幕もありました。

次の第十四回国際女医学会は Brazil で一九七四年九月二十二日—二十八日の間に開催されます。その時の学会の演題は「Genetics and Environmental Factors Affecting Health」(健康に影響

を及ぼす遺伝的および環境的要因)

響を及ぼす遺伝並びに環境的因子。)と決まりました。Brazilには日系人の方が多く親しみやすく、かつ日本語通訳もつくとの事で、日本から多数参加されるようDr. Stolte副会長より特別の御要望がありました。

さて一行は羽田を八月二十八日に出発して、先づこの旅行のハイライトとしてロンドンや South London Hospital for Women and Childrenの見学を企画し、五十人が参加しました。この二八〇床の総合病院の特徴は一九二二年の設立以来女医だけのスタッフで運営されているということです。内科部長Dr. Mary Holtにあらじめ依頼しておきましたので、丁重な歓迎を受け、感激致しました。その晩は英国女医学会の Reception があり、二十人が出席し、なごやかな楽しい一夜をすごしました。

九月二日、目的地のパリに到着。九月三日大部分の方達は Nice, Monaco に行かれ、役員は学会登録を行うため残りました。その晩はフランス女医学会主催の各国会長の晩餐会に会長代理として私が出席しました。これは「Tour D'Argent」で催され有名な鴨料理を賞味致しました。ここは天皇、皇后両陛下も御食事をされたとうかがっております。

九月四日は午前八時から国際連絡書記会議が開かれ、連絡書記は大事な動脈であり、すべての交通には二日以内に返信し、連絡を密にするようにとの事でした。十時開会式。その後フランスの Dr. Diamach の特別講演があり、

Toxoplasmosis の研究発表が Halstedt 会長のあいさつで始まり、日本から三神、小山兩教授の「Toxoplasmosis の疫学」と題する研究発表を藤井先生が代読なさいました。午後は幹部と国際連絡書記の昼食会があり色々討議致しました。皆様はパリ見物に出かけ、夜は Palais du Luxembourg での歓迎 Reception に参加しました。

九月五日、午前講演、午後二時より総会、総会は Halstedt 会長の歓迎挨拶で始まり、この会議の議長をとめる予定の故 Chaval 教授のために黙禱をよび、その後、議事進行について Dr. K. Wright の説明があり、Dr. Lorna Green が前回のオーストラリア総会の報告をされました。つづいて会長報告に移り、会議の評価委員会及び企画委員会設立に関する報告あり、ついで名譽書記 Dr. Martha Kyrle の報告があり、世界の女医の相互理解と友情とを深めるために、各国の女医学会が一層親密になることが望ましいと述べられました。次に Dr. Croese の会計報告があり、替為変動による資金減少を訴えられました。次に副会長の報告がありました。各国の連絡書記の報告は時間がないために会議後の報告書にのせることになりました。夜は Green Hall で役員の Reception がありました。

九月六日、午前は講演、Chairman は小野先生でした。午後二時より総会、一九七二年—一九七四年の役員は選挙の結果次の通りです。

- |      |                                      |
|------|--------------------------------------|
| 次期会長 | Dr. Harumi Ono, Japan                |
| 名譽書記 | Martha Kyrle, Austria                |
| 幹事長  | G. B. Croese, England                |
| 副幹事  | Kaiza Turpenian, Finland (北ヨーロッパ)    |
|      | Holga Thione, Germany(中央ヨーロッパ)       |
|      | M. Fayot-Petitmaire, France (南ヨーロッパ) |
|      | Rosa Ios Nemir, U.S.A. (北米)          |
|      | Roedenbeck, Peru (南米)                |
|      | Robertson, South Africa (アフリカ)       |
|      | Mana Bankoophol, Thailand(中央アジア)     |
|      | Elsie Gibbons, New Zealand (大洋洲)     |
|      | Dr. Morani, Japan, 幹事, フライム, タンク]    |
- ひきつづき新会長 Dr. Morani の有意義な挨拶がありました。各人が傍観者でなく、積極的に行動するようにと強調されました。

一九七六年第十五回国際女医学会の演題及び場所の投票が行われ、演題は、「ウイルス性疾患」、場所は東京と票決されました。引続き討議の結果、会費値上げの件については未決定のまま終了しました。この日、日本女医学会は三神会長を通じて、国際女医学会本部に五百ドルの寄付を致しました。



羽田空航にて 出発前

九月八日は総会見学旅行として Rome で、楽しい一日をすごしました。

九月九日パリ出発、スイスに向かい、ここで二日間滞在しました。その間私には足も痛め、皆様に大変お世話になり感謝致しております。九月十一日スイスよりローマにとび、三日間のローマ見物を楽しみ、九月十五日東京に無事帰って参りました。

会議参加と旅行企画を熟慮する期間、私にとって全く忍耐と努力の長い時間でした。そして百人近い会議参加者がよりよくとまるとするには班の編成が必要であると気づきました。一人の落伍者もなく全員無事に帰国できましたことは、団長三神会長の偉大なお力と小野先生、藤井先生のご活躍とそして十二名の班長の諸先生のご協力が成功へのカギであったと思います。今回参加された先生方のご協力によりカメラマン二名同行し、16ミリの記録映画を本部に寄贈することになっております。

最後に皆様のご協力に心から感謝いたします。

**国際女医学会を日本に招致!**

常任理事 小野 春 生

本年パリで開催されました国際女医学会で次期会長として選ばれましたことは身にあまり光栄と存じます。しかし同時にこんな大役を果し得るか心配です。数年前から国際女医学会の会長副会長会議でこのお話ができました時ご辞退したのですが、諸国の先生方は数年前にわたって私の行動を見た結果、会

長がつとまるといふことで推薦したと  
のことです。また立候補されたブラジ  
ル、フランスの先生は辞退なされ、お  
よばずながら私が引受けることになり  
ました。これは決して私個人が次期会  
長になったのではなく日本女医学会の皆  
様の代表として重責に付いたものと考  
え、あくまで皆様に与えられた地位と  
信じております。私はただただ国際女  
医学会のために、およばずながら全力を  
出して働くつもりでございます。国際  
女医学会がはじめて以来の最若年者との  
ことですのでヤングパワーのためにも  
働かなくてはなりません。考えてみ  
ますと日本は世界ではまだ若い国とい  
えましょう。古いよさを忘れず又同時  
に活動的な面を取り入れ、東洋の美点  
と西洋の美点をミックスして一生懸命  
に働くつもりです。日本女医学会の皆  
様のバックなしでは出来ませぬ。ご指導  
ご援助を心からお願ひ申し上げます。

国際女医学会は、一九一九年に創立さ  
れ、ジュネーブに登録された世界中で  
一番古い国際医学会です。この国際女  
医学会を世間にPRするのが今回のモラ  
ニー会長の計画です。この会の目的は  
(一)、世界中の女性を医学または医学に  
準ずる職業につくように刺激し、奨励  
し、その医学知識を最大限に利用出来  
るように援助する。又、小さい子供を  
持つ女医の問題を解決するよう努力す  
る。(二)、女医の会合を開いて共通する  
問題、特に、いかにして女性を女性と  
して社会に役立たせるかを話しあう。  
(三)、民族、国境、宗教、政治を超越し  
て世界中の女医がお互いに理解しあ

お友達となるようにする。(四)、男医、  
女医の待遇、報酬又は職業への追求に  
対し差別をなくする。以上が国際女医  
会の目的でございます。日本女医学会と  
共に国際女医学会の存在を世間に知らせ  
ていただきたいものです。



→左より  
ストルツ会長(南米)  
小野副会長(日本)  
クロス会計担当(英国)  
モラニー新会長(米国)

さて、四年先の国際女医学会の開催地  
は東京と決定いたしました。開催時ま  
でに国際女医学会の会議規程が定まりま  
す。したがってその決定された規程に  
即した国際会議が開かれると存しま  
す。今日までの会議は主催国の会議で  
国際女医学会の会議ではないという声  
が、大きかった。その規程をかえるこ  
とになりました。各国の会員が参加す  
るだけではなく、協力して始めて会員  
のぞむ本当の意味の国際女医学会議が  
行われるということ。日本での会に期  
待がかけられております。どうか皆様  
いろいろの面でご援助をお願いする事

### 伊豆七島における トキノプラズマの感染状況について

三 神 美 和  
小 山 千 代

私共は昭和四十五年および四十六年  
の五月から十一月までの期間、伊豆七  
島における住民を対象にこれと他動物  
に対するトキノプラズマの感染状況を  
調査したが、その成績の概要を本年九  
月四日パリにおける第十三回国際女医  
会に発表した。今その内容の大略をこ  
こに報告する。

伊豆七島中六島における二年間の対  
象住民の総数は五一七名である。検査  
方法は血清を用い赤血球凝集反応によ  
り行った。全島陽性率は二六・六九%  
であったが、これは現在日本全国平均  
陽性率の比較的高い範囲内にある値で  
ある。これを各島別にみると新島四二  
・九八%、式根島四二・八六%で高率、  
次いで八丈島二二・三〇%、大島二一  
・八八%、神津島一八・一八%でこれ  
らはほぼ平均的範囲内であり、三宅島  
は一五・六%で低かった。感染率は勿  
論地域、年齢、職業等により差異があ  
るわけだが伊豆七島という閉鎖環境地  
域で各島同じような生活環境であり乍  
ら、何故に、新島、式根島に異常高値  
を示すの。この原因探求のため昭和  
四十六年十一月から十二月にかけて新  
島における二部落すなわち本村と若郷

になると存じますが何とぞよろしくお  
願ひ申し上げます。

願ひ申し上げます。

とこれに式根島を含めこの三地区にお  
ける家畜に關係する住民とこの地区に  
棲息する動物に対する感染率を調査し  
さらに住民の受診、内診、臨床的検査  
(主として血圧、心電図、尿、血清化  
学的検査)を行い、トキノプラズマの  
発症状態を調査した。人の後天性トキ  
ノプラズマ症は人よりの感染は少く、  
ほとんどが他動物からの移入によると  
考えられるので、動物における感染率  
を調査したわけである。現在、保有率  
の高い動物は、猫、豚、犬である。現  
在特に豚は一番論議され、これに接触  
する者の陽性率の高いことはよく知ら  
れているが、最近猫の糞便中の〇〇  
?が新しいタイプとして出現しこれ  
が感染源としてクローズアップされて  
いる。伊豆七島は野良猫が非常に多  
く、この猫に最も悩んでいるのが式根  
島、若郷部落である。ここでは猫の数

は五千〜一万頭以上といわれ、人口を  
遙かに凌駕し、昼夜を問わず諸所に  
出没し、人家に侵入し、その被害は甚大  
のようである。

新島における成猫の調査結果は感染  
率六八・八六%と高率であった。又養  
豚業者は新島が盛んであるが、その大半  
は本村部落に集中している。本村にお  
いて現在豚を飼育している家庭の者で  
は感染率は四三・八%と高率、過去に  
おいて豚を飼育していた家庭の者では  
二六・九%であり、両者を比較すると  
明らかにその感染率に有意の差があっ  
た。養豚業者ではその感染率は〇%の  
結果を得たが、この理由は、従業者の  
飼育上の衛生面での注意および衛生管  
理の細心の注意と業者の予防的薬剤投  
与の結果であることがかかる成績とな  
ったわけである。トキノプラズマ発症  
者については、受診者八三名中五名に  
確実に本症と診断された者があった。  
現在、日本におけるトキノプラズマは  
全国的には、その陽性率二十%前後と  
思われるが、伊豆七島では、遙かに高  
率のものがあ、この理由として感染  
源としての広い範囲内では猫、限られ  
た狭い地区では豚がその主体であり、  
これによってその感染率に差異がみら  
れることが今回の調査によって明らか  
になったわけである。

### 第十三回国際女医学会に出席して

添 田 百 枝

八月二十八日午前十時、A班よりひ  
とあしお先に、日本女医学会から代表、

佐野アヤ先生と事務長小川さん、防衛  
庁からは早朝だったので本部の人事課

と教室の代表七名、多数の御家族の方々に見送られB班は二十八名、旅行案内の紅山氏と若手写真班佐藤氏と総数三十名、モスクワへの第一歩を記した。羽田出発上昇後間もなくトイレに立った低血圧の木田信子先生が五六歩あるいたところで通路に横たわり、「機内にお医者さんは居られるでしょうか」フロアの後方から声がした。彼女の主待尾尾島先生がいることと大船に乗っている気持でしたから、反射的に「ウイア オールドクターズ」といつてしまった。機内は友好ムードに包まれた。このこと以外は皆々元気で帰国することが出来た。

ソビエト紀行の詳細は、特集号で報告されると思いますのでここでは省略いたします。二泊三日のモスクワは日本と気候が変らず日中は汗ばんだ。すべて友好ムードで、空港の検察官は若いハムサムボーイが、居ならぶ。至極丁寧で、パスポートをチェックしただけで、すみやかに、音楽の流れでいる、特別歓迎通路をとることが出来た。クレムリン宮に向い合った六千名を収容出来る近代建築のロシアホテルに入り、翌朝、予定になかった児童施設の見学があり、午後市内見物のあと、予定して行った科学アカデミー抗生物質研究所にガウス教授を訪問した。

八月三十日夕刻三度訪ねるロンドン  
は空港からの沿道に、近代高層建築がふえたのは各国共通と言える。

朝翌、サウス・ウイメン・ホスピタルを見学、A班の三神団長、佐野先生

らと一緒だった。当病院の創立の主旨、事業計画、その成果についてはパンフレットをシームールでおくった。社会保障制度の最も発達している国のことであるがフリー棟と有料棟があった。門外漢からみた外国の病院の姿はノンビリムードで、三神院長の双肩にある大きさは比すべくもない。午前中の国際日英親善を終えて全員、チャイナレストランに行く。このグループは、ロンドンタワーに行った。世界各国が集まる団体で、大変な混雑であった。かつて、ここにある世界一大きい王冠のダイヤモンドをみるために、半日おかれて、パリーにやって来た柳瀬夫人に敬意を表して、私も拝見することにした。歴史の流れの中に、ギロチンの暗いかげは消滅して、世界中の人々が此処を訪れる。今は餌をついばむカラスの姿もなかった。

帰えりのバスを途中で下りて、パリーで、買物をして急ぎ帰る。夜は英国女医会長招待のレセプションに行く。中川先生の「城下町」の日本舞踊は好評で、歌い手の小出先生ら日英親善の実を挙げた。帰えってからホテルの室で、ミュンヘン・オリンピックのテレビをみた。日本の男性チームの体操では日の丸が挙り、君が代が奏されていた。テレビを修理に来てくれたポイ達から祝福をうけた。「ジャパンは大したものだ」「おめでとう」といつてくれた。

翌朝早くジュネーブに発った。ジュネーブの空は澄みきって、陽光はまばゆく、美しい色とりどりのバラの花が

咲きみだれ、湖の水は青く、気候は温暖で、まさにこの世のパラダイスである。午後インタラーゲン経由でグリーンワールドへ四時間、バス旅行、かつてチューリッヒからレマン湖のほとりをペンツで百キロをとばし、紺碧の湖水を左岸に行き交う車と人のなつかしかつたことを思い出していた。今草原又草原、牧歌的な田園を走りつづける。みんな仲よしになった。暮色につつまれたころ、ゴウジャスなホテルに着いた。夜は静かに更けゆく。早朝、登山列車でユングフラウヨッホ三四五四米まで行く。地上は曇っていたが登山列車が登るにつれ、頂上を顔を出した、歓声をあげてシャッターを切った。

「酸素の量が少くなるから、余り話をしない方がいいですよ」と紅山氏が云った。皆は優等生だから、一言も話さなくなった。私はひとりニヤニヤしていた。自分の足で登るような、御いでたちのドクター達を、電車の通る側で草をはんでいた牛達はさぞ面白く眺めたことでしょう。かつて見たこの山の牛達はもっと大きかった。あれから何代目かなどと思えて、光陰は矢の如く過ぎ去ることを痛感したので。

快晴にめぐまれた山からグリーンワールドへ又ジュネーブへのドライブを楽しみ、翌日、フランスに入るまで、各々国連本部、赤十字本部、ジュネーブ大学等をまわった。

夕刻、三度オルリー空港に着き、アムバサダーホテルに入る。C班とは御一緒だった。

九月四日、午前九時からの開会式に一同出席した。聞きしにまさるフランス流のノンビリムードで、一時間位おかれて開かれた。フランス学会会長は四ヶ年の間に変遷し、最初の会長は高齢で没し、二人目は病氣、三人目の方は交通事故で逝き、四番目の方が本会長となられたわけで、日本女医会は世界で二番目の出席者九十九名が列席した。開会式後、三神教授らの講演が華々しく発表された。カラーの表がとてまきれいだっし、流暢な英語で報告されたのは印象的であった。日本におけるトキソプラズマ感染状況についての報告であり、困難な診断と検査法を血清学的検査(H・A)に求め、一九七〇年から二年間にわたり、閉鎖的環境として伊豆七島を選んで住民六五四名とその周囲に居る哺乳動物群との関係を明らかにするために検査された成績であり、膨大なもので興味深く有意義な報告であった。日本の講演が一番よかったというところだった。終つてから皆、よかったの連発だった。この講演と前後して、本学会のテーマ「トキソプラズマ症」を提言したといわれる、オランダのボネ女史が総説講演を行い、その通訳を要約すると次の様うけとられた。

一九〇八年にニコール等によってこの原虫が発見され、世界各地に人獣共に寄生する脳水腫脳炎、巨大頭児、小頭児、白痴を生む原因となる感染病で、人から人への感染はないが、猫に入るとチステを作りこの感染が最も多いとされる。妊婦のいかなる時期にも感染するこの原虫は熱によく摂氏五〇〜六〇度で死滅、マイナス二〇度でも死滅する。化学薬品によわい。予防法にまだワクチンなどは開発されていないので生肉、生卵はボイルする。又妊婦から猫を遠ざけよとのこと。治療剤は三ツ位あるが、妊婦に用いた場合これらの薬による奇型児を生むという副作用については未解決。患者の頻度はデンマークで二万人、日本で一万三千人とのことであった。

本学会で一九七六年は日本が主催国となったので心を合せて盛大なものになることを期待する。第二日、第三日、スケジュールに従って、行動し、九月六日午前中、産婦人科の吉田先生の発表を聞きに入った。堂々たる発表で頼しかったし、興味深く拝聴した。

フランスの紀行文は特集号でのべたので省略。

以上今学会で多大の学問的成果を拝聞し国際親善を深めて、私共はローマへ飛んだ。ローマでは行く機会がなかったカタコンベ行きを実現した。私にとつてはこのたびの旅行の最後の晩餐を街にでて、カンツォネを聞きつつ撰り、私をのこした二十九名の方々はアフリカコースに旅立った。翌朝私は公務旅行を終えて、ローマからロンドンへ、ここからアンカレジを経て帰国した。

みのり多い、今学会を企画された役員の方々に最大の感謝と敬意を表しつつこの稿を終ります。

（一九七二・十・十日）

### 第十三回国際女医学会議

### 講演要旨の抜萃(1)

藤井 儔子

第十三回国際女医学会議における学術講演は一つのテーマ「トキソプラズマ症」に關し、疫学調査、診断法、後天的及び先天的感染症の主な臨床像、治療、予防法の各面から四五題の報告が九月四日から七日までに行なわれた。最後の日には今日の問題点について、特に質問箱に寄せられた問題を中心にして、専門家による解答と討論が加えられた。本誌上には、その中から主なものを二回にわけて紹介したい。

#### I 疫学

第一日目に、オランダ、ドイツ、ブラジル、日本、イスラエル、イギリス、フランス、レバノン各国のトキソプラズマ(Tp)感染状況を中心にした報告があった。Tpが全世界に予想以上にひろがり、しかも更に調査を進めれば感染率は上昇するであろうこと、各種家畜、野生動物に高い感染をみていること、ペットとしてのイヌ、ネコが人間へのTp感染に特に重要な関係をもち、なかでもネコの糞便中では有性生殖による増殖も起こることが感染源として、より主要な意味をもつことなど、日本の報告の一部とはほぼ同様な内容が多かった。いろいろな人種の集まっている国では感染率に人種差が認められるようである。

最初の報告者、フランスの M. Nicolle が父の Charles Nicolle が T. Manceaux とともに、一九〇八年にはじめて「Manceaux」とともにTpの報告をしたことと、Toxoplasma gondii と彼等が名付けたことなどを Charles Nicolle の写真とともに示したことから講演会が、はじめられたのが特に印象的であった。

オランダの H. de Roover-Bonnet の報告は疫学調査に加え、動物実験によるTp感染追求に関する綜説的なものである。以下に述べる。

Tpには trophozoite, cyst に加え、抵抗力が最も強く、通常ネコの糞便中に認められる感染型の三つがある。前二者を比較した場合には、ネコの方が、環境変化に対する抵抗力が大で胃液の中でも死なない。trophozoite, cyst は屍体の中でも一定期間、特に低温下で生存しうる。

ネコ糞便中の感染型は Dutchison (一九六五)により見出し出されたものであるが、その後の研究で得られた興味ある成績は次のような点である。

Tpに感染させたマウスを毎日二〜三匹ずつネコに三〜七日間たばさせ、その後連日糞便の感染性を、マウスを用いて検査した。感染マウスをたばた翌

日は稀に感染力をもつ糞便があるが、二日後三日後と次第に便の感染力が増大し、五〜九日目にピーク、以後減少して最初の食餌を与えた時から十三日目の糞便の感染力は0となった。排泄された日に感染性を示さない糞便も二〜三日放置すると、特に一週間ほど放置するとマウスに対しTp感染をおこさせる。ネコ糞便中の oocyst は非常に小さく、多くの人が見逃がす可能性が多い。通常Tpの増殖はニコの親細胞からニコの娘細胞が出来る。この点はネコの糞便中では認められ、しかもTp感染をおこしたネコでは糞便中への排泄が増加し診断上もまぎらわしく、Isospora と異なる。



各国の講演者—中央—藤井儔子氏

Tp自然感染をもつラットのの場合、彼等の糞便の感染力、感染期間もこの実験結果と同じに考えてよいかという問題が残される。

恐らく、自然界でこのように濃厚感染は考えにくいので、感染力は幾分弱

く、また、便が感染力をもつ期間も短かいであろう。日常の実際問題として、感染力をもつ糞便が日々地球上に残されたらどうなるであろうか。一応感染後のネコの糞便が感染力をもつには少なくとも二日を要することが明らかであるから、ネコの糞を毎日綺麗にわかれの身辺から除くことである。これが感染を防ぐ一つの方法である。

第二の問題として、ネコはその一生の間に何回も感染し、ヒトに対し度々感染源となるのであろうか。恐らく感染したマウスを度々食べれば、その度にその糞便が感染源となるであろう。

第三にネコがヒトTpの大きな感染源であるとすると、ネコと、より接触をしやす小児に感染の機会が大きいはずであるが、今日までの調査では、各国ともにTp感染(+)となるのは十五〜三才の年齢群に多いのである。

II 病理解剖に關して  
ウイーンからの Pringer の報告「Tpによる淋巴腺腫脹について」

後天的感染の場合、ほとんど特異な臨床像はみられないが、最も一般的に観察されるのが淋巴腺の腫脹である。その場合も無熱で他の症状なしに、たつた一つ或いは数々の淋巴腺腫脹のみが示されることが多い。一九四九年以降、演者らは一五〇人の Jyngdadenopathy を示した患者を数年間つづけて検査することが出来たので、その結果をのべる。

一般にTpによる淋巴腺腫脹は若年者に多く、また女子において男子より三倍の高位が示された。女子の方がTp

に抵抗が弱いのではないかと考えられる。小児にみられたことはない。他の感染症と比べるとTpによる淋巴腺腫には幾つかの特徴がある。多くの場合、顔、首などを洗っている時に気付くこと、最も多いのが耳の後の腺、また頸部、腋窩部にもみられる。大体はニコだけである。えんどう豆大からサクランボ大、ふれると堅く、時に痛みをうったえる。血沈、X線検査も正常、血液像も時に僅かな淋巴細胞増加を示すのみ、 $\gamma$ -GCI の中等度増加が何例かにみられた。

組織学的にも特異な所見は何もないが、①上皮様細胞の小群が淋巴腺全体に、特に皮質に多く、稀に Langhans 型の巨細胞出現、②淋巴洞内に未熟な組織球出現、淋巴洞は拡張し、増殖した組織球で充たされる像もある。③肝胞の増大、核破片の顕著な喰食像、Tpを淋巴組織内に見出すことは非常に稀であるが、存在する時は cyst である。螢光法を用いると寄生虫は簡単に証明出来、Leishmania や Histoplasma とも区別しうる。

III Tp症の診断  
Tp症の確実な診断は免疫学的検査に

一般にTpによる淋巴腺腫脹は予後良好で、数週ないし数カ月で消失。しかし何らかの原因で体内抗体の減少している時に(悪性淋巴腺腫・白血病・免疫抑制剤治療中など)にTpによる Jyngdadenopathy があると、淋巴節中心部の壊死をおこし、また、沢山のTpを組織中に認めることがある。診断の確定に免疫学的方法を参考にする。

よる証明と同時に *Typhloplasma ganthii* を患者から分離することである。

*Tp* 分離は通常、体液やバイオプシーによって得た組織をマウス腹腔内に接種する。また、染色法あるいは蛍光抗体法を用いて組織や体液中の *Tp* を証明することである。組織を染めずに *Tp* を見つけ出すことも可能であるが熟練を要する。また、脳、心臓のようにバイオプシーの不可能な部位もあり、可能であっても腫瘍などを有する場合は禁忌である。したがって一般に *Tp* 診断には免疫学的方法がより多く利用されている。

今日用いられている免疫反応としては補体結合反応がすでに一九四二年に導入された。六年後にメチレン青 *trypan blue*、次で間接的な血液凝集反応 (*indirect test*)、そして新しく蛍光抗体法が用いられるようになった。

*The heat* は、生きている *Tp* が抗体に接するとメチレン青への親和性が消失し色素をとりこまない。判定は使用した *Tp* の約五十%が色素に染まらないところの血清の稀釈値をとる。この方法の不便な点は再現性をよくするためには、新鮮で、感染力も強い細胞外の *Tp* を使用しなければならぬ点で、このため *Tp* をマウスに植えたり、組織培養によって生存せしめなければならず、経済的にも高価で検査にも時間を要することである。感度と特異性は非常に高い方法ではあるが検査する人々への危険性が大きい。 *Tp* 感染を早期に血清学的に証明する点では他の方法に優っている。なぜなら、補体結合反応で証

明出来る抗体は遅く産生され、また早く消失する。

赤血球凝集反応は、 *Tp* により作り出した抗体で感作した赤血球と検体としての血清をあわせる方法である。感度も特異性もかなり高いものであるが、 *Tp* 抗体作成の良否に成績の確実さが関係する。本法に対する抗体も *trypan blue* に比較すると感染後遅く出現し、しかも徐々に抗体価上昇を示す。そこで先天性 *Tp* 症あるいは急性感染の考えられる場合の診断の一助として本法のみを使用することは十分気をつけねばならない。しかし、大量の検体を処理するには方法も簡単に迅速に出来る点で適している。 *The heat* や蛍光抗体法と併せて使用するとよい。

第四の方法として蛍光抗体法がある。特に近年考案された間接的蛍光抗体法は近い将来、 *trypan blue* や *indirect test* にかわるであろう。

この方法は、まず抗原として *Tp* をスライドガラス上に固定、これに患者の血清を接触させる。次にヒト血清グロブリン抗体に蛍光色素を結合させたものを混する。もし第一段階で *Tp* 抗体と抗原が結合すれば、第二段階で加えた蛍光抗体はこれに接して *Tp* が蛍光を発するであろう。本法の利点は再現性が非常によいこと(九八%)、第二に *Tp* は殺したものを使える、これは危険性をなくすだけでなく抗原を保存することが可能となる。この抗原は通常三〜四カ月安定、判定の終末点もはっきりしている。

明する蛍光抗体法としても用いられる。 *trypan blue* は *Tp* 感染後は急性感染後も数年間血中に存在するので一：一〇〇以上の高い値のみを問題とすれば、急性感染、特に先天性 *Tp* 感染症の診断には非常に役立つものと考えられる。新生児血中に *Tp* 抗体を証明した時、これが胎児由来か母体由来かを区別しなければならぬ。この際、 *trypan blue* は通常胎盤を通過しえないから、これの証明は胎内感染の機会があったことを証明しうるのである。そして、 *Tp* 感染が活動型であることを示してくれる。ただし、臍帯血を検体として使用する時には母体血による汚染を十分注意しなければならぬ。

以上の諸検査の結果として、 *Tp* に対する抗体価が(+)であることは、すぐに *Tp* 症があるとはいえない。抗体価(+)の期間及び価が減少するか、増加するか一定期間の観察も必要である。一般に抗体価が上昇しつづける場合、また、一：一〇二四かそれ以上である時には急性感染が疑われる。補体結合反応においては一：三二かそれ以上で既に活動性 *Tp* 症と診断が可能である。本反応一：八か、それ以下の場合には数カ月前の感染が考えられ、0であっても感染は否定出来ない。一般に *indirect test* では一：六四以下は非特異的と考え、一：六四〜一：一二八は過去の感染の存在を、一：二五六〜一：五一一は現在感染が有ることを示すものと考えてよい。ここで例外として眼の *Tp* 感染症の時は、抗体価が低いことに注意すべきである。

### 第十三回国際女医学会旅行記

第十三回国際女医学会々議に参加する一行九十九名は会議の後

Aコース(八月二十八日〜九月十五日、阿姆斯特ダム、ロンドン、パリ、ジュネバ、ローマ)

Bコース(八月二十八日〜九月十七日、東京、モスクワ、ロンドン、ジュネバ、パリ、ローマ、ナイロビ、インプロセリ、東京)

の二組にわかれて旅行したのでその旅行記を掲載します。

#### Aコース

#### 第一步を

#### 阿姆斯特ダムに

グライル 佐々木昌子

快晴の八月二十八日夜、十時半すぎ

JALUS便で、羽田を元氣にとび立ったA班一行三神会長先生他、会員五十二名、阪急エスコート中村氏とカメラマン小山氏は、八時間後アラスカのアンカレッジ空港で、少憩の後、高度、やはり一万余米、時速九百キロで、北極に一番近い所を廻って飛翔。

白銀の万年雪を頂く岩山が、うねうねとつづく。岩肌が頂からすじのように

に、ふもとへ流れているように見える所もあれば、全く白一色の氷原もある。氷塊が、牛乳のカゼインのように、海一面に浮いているような所を通り過ぎて、美しいステューアードスから、北極通過記念の、日航社長署名入色紙が配られた。

羽田を発ってから約十七時間、八月二十九日朝、七時五十五分、静かに阿姆斯特ダム Schiphol 空港に到着。さすが世界一の設備を誇るだけあって、長い長い動く歩道にのって、乗客は、スムーズに入国審査の方に流れる。

外は雲一つない青空。真夏のような強い日射。阿姆斯特ダムには珍らしいとのこと。"Woman die Engel reizen" "Let die Sonne" か! 一行は、既に待ちうけていたバスに乗って、運河と、レンガ建築の、特徴的な市内に入り、そぞろオランダムードが盛り上って来た所、突如として、黒い四角な、殺風景な、高層モダンビルディングが、私達の目にとびこんで来た。

これが、ホテル・オークラ。私達は、ここに旅装を解いた。二十四階建。昨秋、天皇、皇后両陛下御宿泊の光栄に浴したホテル。

二十二階のお部屋からは、植木の沢山ある中庭を囲んで、四角な箱型に、整然と立ち並んでいる五階建の住宅の

群をみおろせる。このような団地が遠くまで、数多くつづく。平坦な、はらかな土地の景観。人口百万の首都。

緑の美しい芝生に囲まれた運河の一端が、ホテルの庭になっている。二つ三つ、浮遊しているのは、小がもであらうか。

午後は、自由行動で、近くにある小さなダイアモンド研磨工場を見た。

八月三十日、晴。朝から市内観光。駐車場の悩みは、ここも同じく、運河の辺縁まで、一杯に自動車がおいてある。

古い城壁の名残の一角に、別離の(涙の)塔というのがある。十六世紀の初頭、世界各地に船出する漁夫の妻達が、ここから夫を見送っては、別離の涙を流したとか。

オランダ国立美術館(J. K. Oudekerk)。古い煉瓦の、うす暗い建物の中には、オランダ生れの天才画家、レンブラントの作品が多い。

印象に残るのは、有名な「夜警」。また、左の方から見ても、右の方から見ても、いつも自分の見る方向に、足のつま先が、動いて来る絵。解剖の図。これは、左端から見ても、右端から見ても、横たわっている Isotopia が、いつも正面をチャンと向いて見える絵。

私達は、いくら目をこらして見ても、その筆法絶妙の謎を解くことはできず、唯々、感歎したのみであった。

レンブラントの他、人物の衣裳を実に巧妙に画く、ヴァン、ダイクの作品も、多数あった。美術館を出れば、明るい青空。運河

添の道を行って、緑豊かな、田園風景のくりひろげられた郊外に出た。

風車も、二、三見られたが、これはただ、昔の名残をとどめているにすぎない。

広々とした青い草原に見る牛の群はいかにものどかなムード。過去何世紀にもわたり、水との戦に明けくられた、オランダの国土は、その三分の一が、干拓に、干拓を重ねて、作り上げた、海よりも低い土地なのである。所々に、昔、干拓に用いた土手のうず高い名残が見られる。それから私達は、オランダ木靴の小工場を見た。

柳の木をくりぬいて作るところを。再び市内に入り、私達は、あわたたしく、オランダ料理の昼食をとり、たちまち 田舎 機の機上の人となり、午後三時五十分、ロンドンに向けて出発した。

(昭和四十七年九月二十七日記)



小森 あや子

茨竹桃 ニースの海のヨットかな (ニースモナコ)

秋雲に見えてかくれてモンブラン (ジュネーブ)

絢爛の城の日月秋の雨 (ベルサイユ宮殿)

パリシヨッピング・アラカルト 中田 美奈子

因みに私の国際女医会議出席はこの度で三回目である。十二年前のバーデン・バーデン(独)、一昨年のメルボルン(オーストラリア)に次いでのパリ行である。一回目も二回目も真面目に会議に出席したので、今回は国際女医会議に便乗して専らカメラ撮影とシヨッピングを徹底的にしました。

パリ・オルリー空港に着いた途端、ミューン・オリンピック開催のためか物凄く雑踏を目撃し、パリの写真は断念した。命の次に大切なパスポートか又はカメラ(ライカM5)を紛失すると直感したからである。

出発前二ヶ月間、毎朝午前六時に起床し、ヨーロッパに関するあらゆるガイド・ブック(特によかつたのは紅山雪夫氏の『魅惑のヨーロッパ』上下二巻であった)と、パリの市街地図をよくしらべた。凱旋門右側のリュード作「ラ・マルセイエーズ」の写真を、ノートルダムのパラ窓を、夕日に映えるモンマルトルのサクレ・クール寺院を、オペラ座正面の彫刻を、そしてコンコルド広場からマドレーヌ寺院の夜景をといろんな方向から写真を撮ろうと、ライツ一三五ミリ・エルマリート

の望遠レンズとをスリッケースの中へ入れたが、遂にパリの写真は一枚も無しと云う結果になった。その代り、兄(日仏学館理事)の友人であるリッツ

香水店の支配人ジャン・ピエール・ピサンから紹介された小林まりさんをガイドに、三年間毎日履いても型くづれないと云うパリのラバーシューズがポロポロになる程歩き廻った。シチラマ(遊覧バス)もバトウ・ムッシュマ(セーヌ河ボート遊覧船)もオフ・リミットで、二十数回パリへ行った兄のシヨッピングガイドの地図を片手にパリの有名商店を全部廻った。余り歩いたので、小林さんが三日目にダウンして四日目は京大学生のK君がガイドをしてくれた。

エッフェル塔とエトワールの凱旋門の屋上も、アンヴァリッド(ナポレオンの墓)、サンジャックの塔、プロエニユの森、クリニアンクールのマルシエ・オ・ビュース(のみの市)、モンマルトル大通りのグレバン博物館、コンコルド広場、マドレーヌ寺院、ルーヴル美術館、コメディ・フランセーズ、オペラ座、印象派美術館、チュルクー公園、ノートルダム寺院、ルクセンブルグ公園、パリ大学、パンテオン、バステイユ広場、パリ市庁、士官学校(ここはシャイヨー宮からエッフェル塔を通して写真を撮る筈であった)、パリ北駅、モンマルトル、リドー、モンパルナス等、前回にレギュラーコースで廻った処は全部省略した。

先づはグランブルヴァール一帯のシヨッピングである。

サントノレのリッツ香水店で、香水、エルメスのスカーフ、純銀のカルチェライター(以下、お金の話が度々出て

恐縮であるが、日本で十六万円のもの

が四万八千円)、ネクタイ、ブローチ、ネックレスを求める。次にゲランでは(ゲランの香水は他店では売らない)日本の商店で六万円のゲランの「ミッコ」が一万二千円であった。カバン屋のモラビトは大変親切、エルメス、ジョンヌ・ランバンは高いが日本に輸入しているものは割合安い物であることが分った。サンローラン、ピエール・カルダン、クリスチャン・ディオール、パリ。パリ西店(本店スイス)の女支配人は非常に商売上手で人をそらさない。靴とスカーフを求めたら、是非貴女に似合うコートがあるがどうかと云うが、サイズが小さいのでオーダーした。われわれが泊ったオテル・アンバサドールの近くの有名百貨店、ギヤラリー・ラファイエット、オ・ブランタン、女物特選百貨店のトロワ・カルチエは、ロンドン・ナイトブリッジのハロッズ百貨店には遠く及ばないお粗末なものであったが専門店はずすがにパリであった。これで第一日目終了。

第二日目は先づ、レマルク作「凱旋門」で有名な、シャンゼリゼ大通りの「フリーケ」で朝のコーヒーを一杯。パリ最高のフランス人のお金持通りと云われるヴィクトル・ユーゴー通りを散策するにつき当りにサンローランの店があり安い。セリーヌは割合高く、日本に入っているものは日本人向けの安い物。後に行ったスペインの物価はパリの三分の一であったが、パリで安い安いと書いたのは、日本に輸入されているパリのものがそれでも二分の一、五分の一であったからである。シルビ

1.バルタンの店を通って、エトワールのデンマーク商品店を見ながらシャンゼリゼへ帰るその雑踏は銀座や心斎橋の比ではない。レストランに飛びこんだら、ここも行列。十二年前の魅惑のバリは何処やら。あの時の感激の片鱗すらない。人を見に来たようなものである。エリゼ宮横の切手市も見かけなかったし、ショッピングが忙しくて兄に紹介状を書いてもらったオテル・リッツのレスパドン(レストラン)も素通りであった。

前回はドル桿が少なかったのでウィンド・ショッピングしか出来なかったバリも、今回は欲しいものを九九%求め、日頃のストレスはすっかり解消した(バリで香水一本も買えなかった先生もあるとか)。

第三日目は落合先生と三人で、一度グランブルバールの見落した店を廻った。

第四日目はセーヌ左岸(人はセーヌ左岸で頭を使い、セーヌ右岸で金を使うと云うが)の大学街周辺カルチェ・ラタンに足をのびした。ここはパリ大学(ソルボンヌを含む)の近辺で学生も多いが物価も安かった。ここでは高級品はなかったので、お手伝のセーターやバックを求め時間も早かったので食糧品店でコーラ、ハム、パン等仕入れホテルではくつき税関申告の書類の下書きを作製する。

日本では毎夕、五時か六時頃夕食をとるので七時半、八時のホテルの夕食迄マーゲンがたない。明日はランス(フランス)地方の終日旅行で出発が

早いので早く寝ようとホテルの廊下を歩いていると、「貴女はバリの四日間どこへ雲がくわしたの」と同行の先生方に聞かれ、全く恐縮の至りであった。

南米、アフリカ以外殆ど全世界を廻ったが、やはりバリは女性の買物天国である。

スペインも物価は安かったが、フラメンコを踊ったジプシーの物悲しさにはゲンナリした。パリショッピング・アラカルトの筆を擱く。

(一九七二年九月二十八日)

吉岡弥生賞受賞

候補者について

昭和四十八年度吉岡賞受賞の資格者昭和四十七年十二月十日までに本会理事又は支部長宛ご推薦下さるようお願いいたします。

ハムレット物語

中村 マサ

ロンドン最高の繁華街ピカデリーサーカスに程遠からぬピカデリーホテルに陣どった私共三十年前の悪童、夫々はどこか足りないが、三人よれば文珠の智慧とばかり、そろそろたくらんだのが、劇場見物。その昔クラスの名優で、なおその夢すがたきつくもさんがリーダーで、ホテルのブレイガイドにゆき、輪七程のジェントルマンに伺いをたてた。「何か良いお芝居が見

られないでしょうか。」彼の示すリストを見ると「あった」「ハムレット」が。場所は、ブレイハウス。シェークスピアの国ロンドンのみやげに格調高き「ハムレット」が見られるとは、何と幸せな私等。ジェントルマン曰く、「ノーコスチウムですが」。「では歌舞伎の素踊りみたいなものね。結構です」と。岩沼からの弥次喜多両姉も合流し、早速チケットを買った。昼間のスケジュール大英博物館見学も終わったので、時間が早いが一応ブレイハウス

の場所を確かしておこうとタクシーを拾った。ロンドンのタクシーは古き良き時代を表すような黒い箱型の車で、補助席を引き出して、向い合わせに座る。運転手は六十才程の懇ろな紳士でブレイハウスをご存じない。他のタクシーの運転手と相談して来て「どうぞ」という。タワーブリッジを越えて東区に入り、倉庫や大きな建物の間を通って、ここあたりと止った。見廻しても劇場らしき建物は見当らない。「あった」「ブレイハウス」の矢印。だが板がこいだけで建物が無い。「おや」と首をかしげる。板のすき間よりかいまみると何もない。草むらの周囲に、むしろ(?)の棧敷がある。「おんや、これが、ブレイハウス?」超前衛の劇だったのか。するとノーコスチウムとは、素踊りでなく、生れたままの姿の事であったのか。一行は、そろそろざわついて来た。タクシーの小父さんはまだいる。「この辺の夜は用心が良いですか」「終ったら早く帰った方がよい。」「タクシーは拾えますか」「さあ

?」「まだ時間が早いから、希望なら街まで連れてゆくが。遂に涙をのんでホテルに帰った。一寸、安いと思っただが、二・六ポンド払ってシェークスピアのお芝居をふいにしたとは、腹の虫がおさまらない。相変らず格調高いブレイガイドの紳士に「ブレイハウスは屋根がなく、オープンエアだったから止めて来た」「おう、仕方ないね」ところがあとから紳士が追いかけて来た。或は、気の毒だから半額にするとも云われるのか? 「ユーは、屋根がないと云われたが、座席の上にも無かったか?」そう云われると、座席の上だけにテントが張ってあった様だ。「オーイエス、座席の上には屋根があった」「オーイエス」紳士は、納得して帰られた。その夜やけっぱちで参加した夜の観光は、さておき、やはりロンドンで最前衛の「ハムレット」を見逃した事は、無念でたまらない。



パリ大会ごぼれ話

柳瀬 路子

総会・講演会の詳細は三神会長・小野国際女医学会副会長・佐野連絡書記お

よび講演者として藤井助教授の諸氏が執筆されることと思われる。なおまたこれに付随する旅行記については各先生方にお願ひしてあるので、私は今度の大会に同行した折のあれこれ思いつくままにかいてみることにする。

——アムステルダム・フォーレンドム——

和蘭にはお金を落したくなかったが、オークラには一泊する義理がある様に思っていた。ホテルは近代的日本調でひとまづここに旅装を解いて、ヨーロッパに慣れるのも一思案だと思つた。ロビーではオークラの宣伝用にかソ連のスタッフが映画を撮っていた。

午後自由時間となりホテルをとり出す。マルケン・フォーレンドムへの遊覧船に乗りたかったのだが間に合わなかった。タクシーでは四十分で行くという。それ!! というわけで同クラス四人の気軽さで即決。タクシーをとばすことになる。展げゆくオランダの田園。空に向う風車の姿。チーズ工場を過ぎ木靴工場を過ぎ、はね橋を見乍ら約四十分。古きオランダの風物をそのままに残す観光の町フォーレンドムに着いた。民俗衣装の娘や青年が土産物売っている。汀にもやう帆船の帆船。黒い丸々とした衣装の老漁夫が堤防の石に腰を下ろしてパイプをくゆらしている。何も彼も絵で見た通りだ。御機嫌になつて、とある店で娘さんに「貴女の着ているのと同じ衣装をくれ」と言ったら「これは私の母が刺繍したものだ」といって特別手のこんだのを譲ってくれた。赤いバラの美事な刺繡



のコスチューム。それがたったの一万五千円位。大喜びで手に入れてホテルに帰る夕食の席に着て出て皆さんにお目にかけた。

外人の日本人妻

これは日本人の外人妻と書くべきかもしれない。アムスの観光バスについてのがヤコブという和蘭人であった。眼の青い御婦人の口から漏れる日本語に、初めのうちは「日本も大國になったわい」と思っていたが、その日本語が片言でなく敬語も正しく使いわける有様に我々は段々とその婦人に関心を持ち始めた。コースの終るまでに集った情報によると、その人は日本人建築技師の奥さんで目下アムステルダム

の大学で法律を専攻するご婦人。日本料理も作ります。漬物もつけます。和服も着られます。縫います。お茶も、お花も……という話に皆感心し切って我々よりもより日本人的であるという評定が下された。

その後の事であるがニースで井上輝夫という留學生の、これはシリア人の奥さんレイラさんにお目にかかった。夫君により添って慎ましやかに目を伏せるその姿に私は又感心した。夫を従えて闊歩する内地の日本人妻の何と情なく思い合されたことか。

根性

タウン・ホールでのレセプションに出席する折であった。総会場を出て車をひろおうとしても仲々掴まらない。モラーニーさんも英国の女医さん達も近いから歩こうという。行先は判らないがいつてゆけば判るだろうという事になって会長以下歩き出した。セーヌまでは直ぐである。左岸を歩いて橋を渡り右岸の古本屋の店先を歩いて市斤舎へ着いたと書けば道作ないが、その道は遠かった。ラッシュの雑踏の中を前の姿を見失うまいとついてゆくのも大変ながら、重い靴と全財産を持って歩くので手元も重い。足の悪い英国のローリーさんが杖をひきひきサツサツと

歩かれていますので我々も弱音を吐くわけにはゆかない。普段ともすれば車にたよりがちな我々には直ぐの道が直ぐではなかった。汗をかきかきたどりついた会場は聞きしにまさる豪壮なルネッサンス風の建物。パリの歴史を綴る壁画の数々に心をうばわれ去り難い想いであった。

パーティは相変わらず狭い部屋に立錫の余地も無く、一杯のジュースと二つ三つのカナッペを取って貰うのがやっとであったが、それでもマダカスカル

の女医さん達やブラジルの女医さんによしみを通じて引上げた。

カルチェ・ラタン

私にとってバリ大会は難つづきであった。バリは四度目であるので一寸自信もあったのだが、考えてみると右



→アムステルダム ホテル・オーグ

岸しか歩いていなかった私には左岸は全く未知の巴里であった。雨の日、二時間近くカルチェ・ラタンをさまよった事も今は甘酔っぱい思い出となったが、其日は全く必死であった。英語を話してくれそうな顔を捜して道をききたいが、見れば皆お上りさんのようでもあるし、フランス人のようでもある。色の黒いのは少ないし日本人には出会わなかった。それでも掴えて聞いた人は皆、紳士でハムサムで親切に図まで書いて教えてくれた。「パリ大学医学部は何処ですか」「こういらっしやい」。言われた通り歩くが見覚えたことだがパリ大学は二つあって私達は行きつ戻りつ、すぐ近くまでゆき乍ら一筋違いの所をうろついていたのであった。おかげで大学の構内も大分歩いたし解剖学教室、病理学教室の掲示板

も読んできた。パリ大学の学生の生態を少しは知り、聞き囁ってきたように思う。

地下鉄に乗れば方向違いであって地上へ出たら見た事も無い街並。前にこりて自分のホテルへ帰えるしか方法がなかった事もあった。全く巴里は広がった。けれど今度は左岸にも強くなった気がする。モンパルナスも凱旋門にもお目にかかれなかった巴里の一週間ではあったけれど、朝夕ホテルへ帰える小路の真正面にはいつもサクレクターの白い塔が見えた。秋の驟雨がプラタナスの大きな葉を叩きつけるように降った或夕、石の壁に寄り添って雨脚を見上げて居る若い二人の姿をも見た。矢張り巴里はエトランゼの詩情を誘う都会であった。

生涯の最も長かった一日

伊太利はポロニアの駅前ホテル。九月二十二日。今日は日本へ帰える日である。六時起床。スーツケースを出し、篠つく雨脚を眺め乍らミラノへのバスを待った。

六時四十五分になってもバスは来ない。仕方がない、汽車で行く事にしよう、七時十八分発の列車に乗るべく各自荷物を持って駅へ向った。スーツケースが積込めれば乗っても良いとの事でプラットホームで列車を見上げていたが定刻をすぎて何とか乗込む事が出来た。車窓には緑の田園風景がつづく。今日はミラノでバリ行のエア・フランスへ乗らねばならない。十一時十五分発の筈だ。気はもめるのに列車はとある駅に三十分以上も停車してい

て動きそうもない。ままよ。なるようにしかならないだろう。ミラノ一泊か。パリ一泊か。など考えていたが、十一時ミラノへ着いたら旅行社のバスが出口へ横付けにされていて、十八人乗車へ乗車オーライというわけで飛行場へ飛ばした。エア・フランスは待たしであるという。馳けつけた飛行場では荷物の重量超過も何もすつ飛ばす。直ちに待合室へ入った。機内検査・身体検査にてまどつて出発が遅れていたの

で機内には悠々と乗り込めた。バリ発十三時五十分アムス着十四時四十分アムス発十六時五十分アンカレッジ着二時三十分。時計の針を六時間後戻りさせてもアンカレッジは明るい。アンカレッジを出て二時間、日付変更線のところまで二時間後戻りさせた。快晴のアリュニオンを通り日航機は快翔を続ける。羽田着は予定より二十分程早かった。

二十六時間ぶつ通しで昼間が、連続したこの一日は朝まだきの放れ業もあって流石長い一日であった。靴をはき通した皆の足は可愛らしく腫れ上り娘の足のようになっていた。

パリ  
オールドバリエのしじまに眠るとき  
ノートルダム寺院閣に屹立す  
スペイン  
洞窟にひそみすまじジブシーの  
うたごえ悲し フラメンコ哀し  
シエラネバダの山脈に赤く夕陽はえ  
グラナダの町に驟雨はれきぬ

山本美代子

Bコース

モスクワ

(第四班)

政川 ゆき・坂井タマノ  
中島 シズ・岸 千鶴子  
長尾スミ子・真中はるゑ

東京より十時間の空の旅を終え、降り立ったモスコウのセレメチューホ空港はあまりにも広漠たる広さにまず眼を見張りました。

モスコウ市内に入るまでの沿道の統一された様子、アパートの林立には他の都市にみられない印象をうけました。二泊の旅でしたが共産圏の特徴が現れているようで個人の生活を犠牲にして、国家の繁栄をほこっているような感じがいたしました。列をなして食糧品を買っている有様、品種改良がない、小さい小さなリンゴ、大きい種のあるきゅうり、果物もなく旅行中で一番まずくそしてサービスマも悪い食事でした。テレビでよく見る赤の広場は案外狭く、プーシホコ広場、チャイコフスキー広場、ベニスキー広場と沢山あり、そこには必ず立派な銅像があり、ゴリキ一大通りの菩提樹の並木は立派でした。スターリン時代に防空こうであったと言う地下鉄はものすごく早い急勾配のエスカレーターで地下深く降り縦横の路線の走行や、広場におかれた立派な革命戦士の石像などをみておどろいた次第。衣服は質素で、食物はま

ずかったが、ウラジオストック大学で日本語を勉強しているという案内人は何事にもほこりをもって説明してくれました。しかし私はしみじみ日本の有難さをかみしめました。

スイス・イタリア

(一班)

森川みどり・岩崎てる子  
遠藤 ハナ・遠藤 まり  
野村多賀子・佐藤千代子  
後藤 明代・吉田 茂子

「ケニアが当りますように!!」との願いも空しく我班はスイス、イタリアを書く事になって了った。

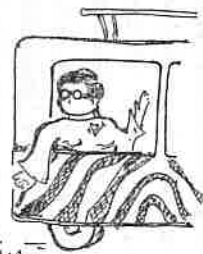
スイス、ローマはAコースの先生方もいらつしやいますし、又、前回のウイーンの総会の際にも廻りましたので二、三の忘れ難い思い出のみにとどめましょう。

▼スイス、グリーンデルワルドのホテルの純白の印象!! 雪原に埋もれた土に咲くエーデルワイスの如き可憐さに満ちた白の部屋はスイスの山にふさわしいホテルであった。

▼登山電車の乗換点であるクライネンヤイデックに降り立ち、眼前に迫る氷河の威容に息を呑んでいる時、清らかな空気をゆるがして聞えて来たホルンの音。緑にかすむ彼方の山の中腹で、我々の姿を認めて歓迎に吹きながらいる長い角笛であった。サンキューと応える声が長くこだまし、角笛の主も手を振って小屋の中に消えた。

一班の行動記録

(画………遠藤まり子  
説明………佐藤千代子)



森川みどり先生

ライオンが「日本へ連れて行って!!」と言ったとか、言わないとか、バクダットの王様風バンタロンが隠れているのが残念。

ナンダゴゾータイバツカリ大キイクセニペラペラペラ



岩崎てる子先生

オーペリーグー、サンキュー、マイマザー  
日本語のたなかですぐ外人と仲よくなる岩崎親分。

▼ローマの市内観光の折、情けなく思ったことはテレビの噴水で見た光景。箒で池を引かき廻したり、糸につけた

磁石をほうり込んでコインを釣っている若者がいたことであった。池の水は泥水になってはいるが青い空をちぎれちぎれに映していた。

▼ローマの夜はカンツォーネとレストランと。商魂たくましい男性歌手は、我々のテーブルを廻って一人一人に大サービス。リクエストすれば「上を向いて」「サンタルチア」「オーソレミオ」と声を張り、果はキッスのおまけ迄ついて一同いささか調子の上がったローマの夜ではありました。

(佐藤千代子)

パリーの記録

B班二組

添田 百枝・木田 信子  
尾形登美子・尾島登志子  
山本 いし

このたびで三度、私はフランスを訪ねることが出来ました。度を重ねる毎に、パリーの街に愛着を覚えていきます。九年前に、ドイツのスツツガルトで開かれた、第三回国際化学療治学会の帰途、パリに出むき、最初の感激にひたつたものです。再び四年後、第五回同学会がウイーンで開かれ、その帰途パリに寄り、初回に果さなかつたセーヌ川の舟遊びや、ベルサイユ宮殿からトリアノン宮殿めぐりをいたしました。丁度ウイーン滞在が長かったのでマリア・テレサ帝の愛嬢だった悲劇の女王、マリア・アントワネットの伝説がしきりに思いだされました。このたび第十三回国際女医学会に参

加できましたこと、短日時その帰路におこなわれた旅行に森川団長はじめ佐藤班長沢山の友人が来てうれしく思っております。

学会の事につきましては、別項「国際女医学会に出席して」のところで述べさせていたいただきましたので、専ら、足で歩き、心にうつたことにとどめます。

このたびパリーの思い出の記に加わった小文は、パリーの西端に位するブローニューの森への遠出のことです。ここはマロニエや、楓、アカシヤがおおい茂っている森です。ナポレオンがモスクワ遠征に失敗、エルバ島に送られる日、馬蹄型の階段をもつフォンテスブロー宮で将兵に別れを告げたといわれ、歴史の役割の終った城で有名であります。中庭にはピラミッド型に手入れの行きとどいた杉の木が色こく立ちつきし、日ざしが強かつたことを覚えていきます。この宮殿からの帰途バルビゾン村で昼食。コロイヤミレーからルソンの自然を求めた画家たちが住みついたといわれる、静かな小村のただいまい、両陛下が立寄られたと説明して下さった。食後、無名の画家の絵をならべている画商の店に立ちより、この芸術の村に心をこめて、私は不意にソビエットでこわした歯の治療に迎いに来て下さった松尾二佐の車で尾島さんと、通訳して下さった尾中法学日大教授(石田妙子理事の実姉)と一緒にパリーの歯科医にむかった。ホテルのような美しい治療室で、予約制で患者は一人もいない。スペイン人のきれいな

看護婦さんが一名つきそい、ハンサムなドクターが治療してくれた。パリでは外国のドクターの治療は無料の由、うけたまわって恐縮して帰って来ました。



閉会式会場にて

九月七日は吉田先生の流暢な英語の講演を聞きに行った。英語の通じない図表係のために、むしろ効果的で印象にのこった。午後はベルサイユ宮殿行きのバスに乗りおかれて、ヴィクトリアホテルまでタクシーで追いかけたけれど、とうに出発したとのこと、折しも珍しくぽつり／＼雨が降って来たので急いでタクシーにのり、しのつく雨の街を走った。壮観であった。これは閉会式に出よということだと思つて会場にかけつける。雨はうそのようにやみ有終の美を飾った。

夜は本学会の庄巻、国際交流のバンケットに、日本国内では、到底演出出来ないような、インテリ・ドクターズ、十％位はイブニングドレスであったが、他はあでやかな、美しい和服姿、全く壮観でした。

翌日八日早朝、学会旅行でフランス地方に小旅行を楽しみました。A B班も勿論一緒でした。特別仕立の汽車の旅です。窓からうつりゆく郊外のどこもここも、この国は富の蓄積が世界一といわれるだけあって、夢があり、清潔で、美しい。ナポレオン以外の国王が戴冠式を行った由緒ある大聖堂を見学し、ステンドグラスは、第二次大戦で破壊されたものをおぎなつてあるとのことでした。

ここからバスでシャンパン工場を見学しました。偶然にも醸造学の見学です。心おどるものがあります。シャンパン蔵は地下へ百十六の階段を下つて、昔、石灰石を掘り出したあとといわれ、適温摂氏十度で、これがシャンパンの醸酵貯蔵庫で、そのトンネル倉庫はのべ十六軒といわれ、道に迷わぬように各々のトンネルの入口には各国のネームが書いてあります。千四百万本が五年間ねかされていて、これが世に出て人々に祝福を与えることでしょう。

翌朝、フランスでの日程を終えて、ローマにむかいました。この旅行を与えて下さつた諸先生方に感謝しつつこの稿を終ります。

(一九七二・九月末日)  
文責 添田 百枝

### ケニア

(第三班)

- 大岡 一子・明石寿美子
- 二見 とめ・若江 百枝
- 上条 正子・潮田智恵子
- 吉村 貞

ローマを夜の十二時に出発して、ウガンダで(午前七時)中継三十分後にケニアのナイロビに到着、ブーゲンビリヤの花が美しく咲き乱れ、マロニエ、カシヤ等の並木は想像していたとは大違い。ナイロビヒルトンホテルの周辺は新興都市だけあって、高層建築が並び、都会化している。

昼食後、午後二時二十分サファリーカーに分乗。キャブテン、ジュームスの案内で補装された道路をスイスイと走り出す。約四時間余の道程で途中に家畜の牛の群を連れたマサイ族の男が長い「ヤリ」の様なものを持ってサファリーカーの方を振り向く。キリマンジャロの頂上が輝いて右に見え、左に見え、見渡す限りの平原、草むらもあれば、全く赤土のまま枯草がはえていたり、見知らぬ樹木があり、アンボセリーのテント小屋に着く頃は日が傾き始め夕日がとても美しかった。

テントの前方にキリマンジャロを望んで七時三十分より夕食、その頃の周囲は真暗闇にキャンプ・ファイヤーが燃え、黒人のボーイがいろいろと世話をしてくれる。電気はなく勿論、ガスランプをともしたキャンプでの一夜はゆっくりに寝つたれない。気温が少し低い上に風が野獣の泣き声に似て気味が悪く、朝は小雨が降っていた。

午前六時三十分サファリーに出発、



ケニアにて

ばかりでもない。午後には一旦ナイロビのヒルトンホテルに戻り、十三日にはアバデアカンツリークラブからザアークへ行き野獣を、ナクル湖でフアラミングの見物に出かける予定である。

(潮田智恵子)

- アフリカニキテダグロニアタリ
- ドッコインヨ
- タヨリカクトハ
- コーリヤ
- フシギデシヨウ
- チヨイナチヨイナ

(ケニアにて 明石寿美子)

### セイシェル島

副団長 森川みどり

Bコース最終の訪問地セイシェル島は別名を「エデンの園」とか。空港からリーフホテル迄の大コヤシの並木通りは、南国の饗宴というところ。翌十六日(日曜)の午前九時からの観光は展開するココヤシ、パンの木、シナモン、アカシヤに寄生した形のバナラの香木、ハイビスカス、ブルメリヤ、ポインセチア等の喬木、色とりどりのブーゲンビリヤなどが点在し、それらが深い深い濃紺の空と調和し、エデンの園をさ迷う心地でした。全島が植物園そのままなのに、なお、ガイドさんが植物園に案内すると言われた時には奇異なおもいが頭をかすめた。ところが園内の低地に棲息する陸亀が私達を乗せて、ハイハイ、ノコノコ歩き廻る姿のおかしさ。まるで文明から原始への折返点であったかのようです。同じ地球上に今なおこのような地点が残っていたのです。セイシェル島とは伝説

理事会議事録

この度の旅行で班長さん単位をとって頂いたことは、よいアイデアであつて、お蔭までお世話役を申しつけられた私はお役にも立たなかつたのに、恙なく、たのしい晩餐会を囲むことが出来、先生方の御力添えを感謝しつつサンキュウ スパシバ(ソ連) グラチエ(イタリー) アーサンチ(ケニヤ) マルシー(セーションル)を捧げ稿を終えます。(七二・九・十七)

日 時 昭和四十七年七月二十二日 (土) 午後三時

場 所 東京女子医大中央校舎一階 会議室

出席者 二三名

庶務報告 (柳瀬常任理事)

○会員物故者

飯塚 富美(神奈川県) 四六・八・一八

吉井田鶴子(中央区) 四七・五・五

秋山 文代(静岡県) 四七・六・六

徳山 幾代(青森県) 四七・六・一七

尚湯本アサ理事御夫君御逝去に当り理事一同より御供物を供えた。

○会員叙職

荒川あや理事社会教育部にて勲五等瑞宝章叙職さる。

○支部活動

愛知県支部(支部長森川みどり)では、沖縄県学校施設資金としてNHKを通じ三万円を、沖縄在住会員吉田春子姉を通じ六万七千円を寄贈した。

○寄贈 本

一、日本列島改造論(田中角栄著) 都民婦人の意識と実態調査(東京都民生局)

○総会出席者 三九三名、ニューフジヤ宿泊三百一名、観光旅行参加者は、修善寺方面六二名、館山寺方面五八名であった。

当日の日本女医学会パッチ売上げ三十四個、ルーベンドン売上げのローヤリティー収入五千八百円。

今回の水害に対し秋田・愛知・岐阜・岡山・高知・島根・福岡・佐賀・熊本に打電した。

会員の被害状況次の通り。 全冠水 黒瀬真理子(広島県三次市) 床上浸水 落合 コト(品川区)

別紙一号により昭和四十七年六月分の会計報告あり。

①昭和四十七年度事業計画について TOP賞について

総会で P. B. H. G. になつた TOP 賞をどうするか。

会長(継続審議を取立てする事もないという意見が常任理事会で出たが、どうするか。

奨学金の支出を他の案で検討しては如何? TOP賞は見送り代案を検討することに議決(会長)

性教育について 財団法人日本性教育協会主催の第一回性教育夏季セミナーが八月三〜四日の二日間京都でおこなわれる。

性教育担当の湯本、阿部両理事出席を願つては如何? 可決 山本理事(報告して下さい) 会長(性教育に関する文献は相当集つた。今年はどういう方向へ持つてゆくか?)

湯本(タンポンの問題をまとめた) 〇ルーベンドンについて 売上げも伸びている。新製品もできたので、サマーセール期間を延ばしている。金銀など高級品の売上げが伸びているが、このローヤリティーの問題など

検討したい。 阿部(不良品の修理はどこに出すか?)

小川(無条件で交換する事になっている) 会長(老人ホームへ寄付した分も考慮してもらいたい)

②国際女医について (佐野国際連絡書記) 〇本日迄の参加人員は九九九人。中九〇人が会員である。

(Aコース七十名 Bコース二九名) 国際女医学会本部へは親切で百七人の登録をし九九九フランを送金した。

〇団長は三神会長、世話役・小野、佐野、藤井、出席はAコース八月二十八日午後十時半、Bコース同日午前十時

帰国はAコース九月一日午後四時四十分、Bコース九月一日午後四時

十時結団式は八月二十七日午後二時〜三時 ホテルニューオータニで行う。

〇欲求会は、同日同所にて午後三時〜四時、会費不要。

〇国際女医学会への寄付は本部より二十ドルとする。

〇ジャパンフィルムセンターよりアルバムおよびハミリ作成の勧誘あり。

現在迄の会員申込アルバム五五名、ハミリ三一名である。話がまとまれば一六ミリトキーを本部へ寄贈してくれるので未決定の会員にも呼び掛けて実現したい。

〇ロンドン滞在中 South London Hospital を見学する事になった。尚八月三〜一日英国女医学会より先般来日された時当方で歓迎したお礼に招待をうけて受けるが、理事と班長に教をしばって

〇長(当日、日本から発表する論文は別紙二号のものである)なお英文を百部印刷して会長、副会長などへ配付したい。

会場でルーベンドンを売らせてもらえるよう提案したいと思うが如何? 一つ三千円のものなら女医学会のローヤリティーおよび国際女医学会への寄付を含めて四千五百円位になる。

〇可決 国際女医学会の委員会に日本からも委員を出して運営に携ってもらえと現会長ヘルワテッドさんから勧められたので、山崎、佐野、中村さんを推薦しておいたが委員会の委員長がこれは決定する。

〇尚総会中急に決定を要する事項の起きた時は参加理事の会議で決定してよいか? 可決

③水害見舞金の額を、次の通り決定した。 全面冠水の時 一万円

床上浸水の時 五千円 床上浸水の時 二千円

以上 柳瀬 路子

△本部だより▽ 〇ルーベンドン年末年始特別セールのお知らせ

左記期間中は特別価格でお送りいたします。 昭和四十七年十一月十五日より 昭和四十八年一月十五日まで

ルーベンドン(実用新案) 特許登録

★からくさ シルバー製 九千八百円(鎖付) 十八金製 一万四千九百円

★デラックス シルバー製 九千八百円(鎖付) 十八金製 一万四千八百円

★シルバークラップ型 八千円(鎖付) 一万二千円

★ベンダント型 金色枠 三千円 銀色枠 二千円

★スタクエア(大) シルバー製 九千八百円(鎖付) 十八金製 一万四千九百円

★スタクエア(小) 十八金製 一万二千円

すべて正価(送料共)です。 〇日本女医学会年金制度ご加入のおすめ

掛 金 毎月三千円を一口とし、年令により異なりますが八口まで加入できる。

送金方法 銀行振替、普通預金口座より毎月自動的に送金する。

日本女医学会年金制度お申込みは直接本部にご連絡下さい。

〇年金委員会 〇会員並びに家族関係者のための

〇冬季欧州の旅 募集!! 〇旅行期間十三日間

自昭和四十七年十二月二十七日(水) 至昭和四十八年一月八日(月)

〇旅行日程 東京―アムステルダム(一泊)―ロンドン(二泊)―パリ(三泊)―ジュネーブ(一泊)―モンブラン―ローマ(三泊)―東京

〇総経費 二万六千八百円 〇締切日 昭和四十七年十一月二十日

右旅行にまだ余席がございますので年末年始のおくつろぎにご家族ご友人お誘いあわせの上至急お申込み下さい。

カット(国際女医学会会議に参加された倉 八千代氏)

昭和四十七年十月二十日印刷 昭和四十七年十月二十五日発行 編集人 久保田 久 日 本 女 医 会 発行所 東京都新宿区市谷河田町19 社団法人 日本女医学会 TEL: 〇九六八 印刷所 東京港区白金五〇四一 興栄美術印刷株式会社 題字 吉岡 弥生